

『天地明察』論

● 土 屋 博 映

一、はじめに

『天地明察』は作家沖方丁（うぶかた・とう）により、09年に書かれた、彼の最初の時代小説である。本書は、第31回吉川英治文学新人賞、第7回本屋大賞、第7回北東文芸賞、2011大学読書人大賞、等様々な賞を受賞、さらには『おくりびと』でアカデミー賞を受けた滝田洋二郎により、映画化もされている。俗な言葉で表現すれば、現代にばかうけした作品ということができる。本書は、貞享暦を、実質的に、独力で成し遂げた人物として知られている渋川春海を主人公とし、彼と関わる様々な人間模様を描いた時代小説である。

彼は多才であり、複数の学問分野に熟達しているが、囲碁の名門、安井家の次男、算哲として、名だたる碁打ちとしても知られている。本稿では、一つに、沖方丁は本書で、何を伝えたかったのか、もう一つには、現代受けしたのはどういう点なのか、という作者側と読者側の双方の視点から、『天地明察』論を展開していきたい。

二、概要

序章

生涯の大仕事、「改暦の儀」にやっとたどり着いた46歳の「安井算哲」。彼の耳に「からん、ころん」という23年前の算術絵馬の音が聞こえる。

第一章 一瞥即解

「安井算哲」こと「渋川春海」。囲碁の名門安井家に生まれ、御城碁（おしろご）まで勤めながら、興味は算学に傾いている。普段は京都住まいで、秋から冬にかけて、安井家と親しい会津藩江戸屋敷に身をおき、御城碁を勤める。藩の同じく算学好きな「安藤有益」という友人に噂を聞き、金宮八幡宮の算額奉納と呼ばれる算術絵馬を見に行く。そこで膨大な絵馬とともに算術の天才「関孝和」の存在を知り、後の妻となる「えん」と出会う。絵馬の「からん、ころん」の音が耳に残った。安井家とはライバルの本因坊家の天才棋士「道策」は、春海の囲碁の才能を認めるが、彼が囲碁に精進しないのを苦々しく思っている。老中「酒井忠清」（後の大老）は囲碁指導に名をかりながら、春海の実力と人柄を見抜く。

第二章 算法勝負

「酒井忠清」を敵視する「井上正利」が算哲に「酒井」との仲を怪しむ。「道策」は相変わらず春海に碁の勝負を挑む。江戸城天守閣は消失の後、再建されなかったことに新時代を感じる春海だった。「関」の噂を聞き「安藤」も興味を持つ。春海は「関」に会う手立てはないかと磯村塾（村瀬塾）に行く。そこで算術教師「村瀬義益」に出会うが、再び「えん」とも出会う。「村瀬」は、「えん」と兄妹のような間柄だった。二人から天才「関」の話の聞き、「村瀬」から、「関」の算術書を貸してもらおう。その内容の偉大さにますます「関」への興味を抱く。「酒井忠清」は

「一に碁。二に神道。三に朱子学。四に算術。五に測地。六に曆術。」という春海の多芸に興味を持つ。そして「北極出地」を命じる。そのため御城碁を離れる謝罪を囲碁仲間に伝え、了承されるが、「道策」は無念さをおさえきれない。春海は出立前に「関孝和」に算法勝負を挑むが、春海の設定には解答不能の誤りがあった。うちのめされた彼を「安藤」と「えん」が励ます。「えん」が言うには誤りではあるが、「関」は問題そのものには好意的であった。「えん」に一年だけ待ってくれといい、彼は旅立つ。

第三章 北極出地

寛文元年12月1日、14名の観測隊は富岡八幡宮に祈願して北極出地に向かう。隊長は62歳の「建部昌明」、副隊長は57歳の「伊藤重孝」。「建部」と「伊藤」の天文に向ける好奇心に感心する春海であった。晴海は、歩測で北極出地を完璧に的中させた一件等から次第に元気を取り戻すようになった。また曆の存在価値の意外な大きさに気がつき、現在用いられている「宣明曆」は、ずれていて、それを改めないのは、朝廷側のよこしまな権威によるものだと知る。また「関」の実力を知った二人が、入門したいと言い、春海の誤出題を、「見事な誤謬」と称える。旅の途中、「建部」は倒れ、隊から離れる。彼の死は「伊藤」から知らされる。「建部」の「精進せよ」という言葉を思い出し涙する春海に「伊藤」は「頼みましたよ」と願い、「頼まれました」と答えるのだった。「建部」は「渾天儀」を抱いて死にたいと言い残した。旅から戻り、「村瀬」に会いに行くと、「えん」はすでに嫁いでいた。今度こそその思いで「関」に出題すると、彼は見事に解答し、「明察」と記す春海だった。

第四章 授時曆

老中「酒井忠清」は大老となった。春海は「こと」という女性と結婚した。「ことは幸せ者でございます。」というのが口癖だった。義兄の「安井算知」は碁所に就任し將軍家綱は「本因坊道悦」との二十番碁を命じた。春海は「水戸光圀」に招かれる。指導碁を打ちながら、「渾天儀」を製作する意欲のある春海を称え、自分も所望すると伝える。翌日今度は「酒井」が春海を招き、会津藩主「保科正之」の意向を伝え、会津に向かうことになる。幕府の重鎮、將軍が一目おくほどの「保科」と指導碁を打つことになった。何と「保科」は初手を天元に打った。「保科」は、一揆をなくすために「民の生活向上」を大目標とした。彼は戦国の常識を切り捨て、太平の真の始まりのための政治という、発想の転換をなした。その結果「会津に飢人なし」と言わせしめた。その発想は、江戸の町作りにも幕府の政策までも及んでいる。春海はただ感嘆した。「保科」は春海に「改曆の儀」を申しつけた。しかも総大将として。それは、「水戸光圀」「酒井忠清」「山崎闇斎」「建部昌明」「伊藤重孝」「安藤有益」たちの推薦によるものだった。改曆の仕事部屋が用意され、「山崎」「安藤」「島田貞継」たちと会合、「岡野井玄貞」「松田順承」などにも助力を依頼。ところが朝廷は「授時曆は不吉」といって取り合わない。春海たちは一旦解散するが、改曆の意欲に燃え、春海は江戸にもどる。御城碁では、安井家と本因坊家の激突の様相を呈していた。そんな中「道策」との一番、春海は初手を天元に打つ。天元と北極星を重ね合わせた「道策」は天元打ちをやめさせるべく、勝負を挑むが、弟「知哲」が代わりに相手をする。「建部」の遺言の「渾天儀」が完成した。それを献上された「光圀」は怒りにも似た強烈な喜びを発し、「改曆の儀」を果たすように命じた。後、「光圀」には「地球儀」と「天球儀」も献上し、大なる称賛を受けた。「渾天儀」をもらった「伊藤」は涙を浮かべ、感謝の言葉と「頼みましたよ」といい、春海は「頼まれました」と答えるのだった。春海は「道策」との御城碁に「保科」から下賜

された「大殿様草鞋」を腹に巻き、対決する。結果は「道策」の勝利だったが、堂々たる負けぶりに、「安井家に一日の長あり」と好評価を受けた。

第五章 改暦請願

愛妻「こと」が亡くなった。直後「道策」に惨敗したが世間は春海に好意的だった。続いて「伊藤」も世を去った。悲しみを乗り越えるように春海は事業に打ち込んだ。戦国から太平へ、という流れを担っているのは「保科正之」と「酒井忠清」。この二人を父のように仰ぐ春海だった。「宣明暦」が触の予報をはずした3日後「保科正之」が世を去った。「保科」は死に対しても用意周到だった。側近「友松勘十郎」の意見もあり「十五箇条の家訓」を残した。「保科」は随一の神道家「吉川惟足」の弟子として神道を極め、秘伝を授けられ、「土津（はにつ）」なる靈号を受けた。最後の講義を「山崎闇斎」から受け、「改暦の儀を晴海に主導させよ」と言い残して去った。「保科」の遺言に力を得て改暦請願にこぎつけた。そして、「宣命暦」に対抗させるべく、「授時暦」、さらには「大統暦」の三暦を並べ触の六番勝負を行った。「村瀬」を訪れると「えん」に出会った。何と晴海と同様、「えん」も連れ合いを亡くしていた。三暦勝負について「関孝和」どう思うのかが気になった。「えん」に勝負が終わるまで待ってほしいと伝える晴海だった。「村瀬」から借りた「関」の新しい稿本はさらに進歩し、天才振りを遺憾なく発揮していた。六番勝負の五番までは「授時暦」が的中を続けた。その間、世間から毀誉褒貶を受ける晴海だったが、意に介さなかった。しかし、よもやと思われた最後の一番だけがはずれた。それだけで「改暦の儀」はすべて消えた。世間からは嘲笑されたが、囲碁仲間は暖かく迎えてくれた。義兄「算知」は本因坊「道悦」に負け、碁所の座は本因坊家に譲られた。若い「道策」は「関」同様、天才振りを遺憾なく発揮。誰も歯が立たない強さだった。算術が変わり、囲碁が変わるのに、暦を変えられない自分が情けなかった。そこへ「えん」が迎えに来た。塾に「関孝和」の自分宛の出題があると知らせに。

第六章 天地明察

「関孝和」の設問は何と解答不能のものだった。それには「関」のメッセージがこめられていた。「関」宅に会いに行くと、彼は晴海に罵倒の限りをつくす。罵られるままの晴海。しかし、それは愛情の罵倒であった。メッセージは「授時暦」は完璧ではない、ということだった。実は天文にも興味があった「関」は自分の資料をすべて晴海に託すのだった。「授時暦を斬れ、渋川晴海」「頼んだぞ、囲碁侍」の言葉とともに。「村瀬」塾に戻り、「えん」に突然の求婚をした。あきれ「えん」。しかし「そばで見張って差し上げます」という承諾の言を口にした。二人は、それから一年半後、約束より半年遅れて結婚した。晴海は、それとともに改暦の事業を再開する決意をした。そのためには「伊藤」とかつて約束した「己が大地の再設定」をしなくてはならない。碁所の本因坊「道悦」は引退し、跡目を「道策」に譲ることとなった。「道策」の圧倒的な強さに、争碁はなく、碁所就任が決まった。結婚当日、昔あざかった晴海の誤問を取り出す「えん」。「私より先に死なないでくれ」と願う晴海。充実した晴海は、天才「道策」との御城碁で、5日、3日の差にまで迫り、大いに面目を施した。その後「道策」は多くの弟子を育て、囲碁界に貢献した。「関」も同様だった。「関」の所に、「建部昌明」の甥の兄弟が入門した。晴海は目が潤み、昔「建部」に励まされたように、「精進せよ、精進せよ」というのだった。晴海は『天文分野之図』を出版し、世間に渋川晴海、ここにあり、を印象付けた。それは「伊藤」の墓前に捧げられた。さらに『日本長暦』を著し、占星術を完成した。その二冊は「水戸光圀」にも献上

された。彼は再び怒りの形相で喜びを表し、晴海に改暦を勧めるのだった。晴海はそのためには御禁制の洋書が必要なことをつげると、「光圀」はそれを即座に取り寄せてくれた。「安藤」の算術の師「島田貞継」が死去し、晴海はさらに改暦成就を誓うのだった。將軍「家綱」が死去し、老中「堀田正俊」が計略をもって「綱吉」を將軍とした。「酒井忠清」は大老職を退かされた。隠居となった「酒井」の私宅に指導碁に行った晴海に「酒井」は「二刀」と多額の金子を与えた。そして「保科公の気持ちだ」と言い肩の荷をおろした様子だった。なき天守閣の向こうに新たな時代の青空が広がっていた。その三ヶ月後、「酒井」は逝去した。58歳であった。これにうろたえたのが將軍「綱吉」。「酒井」の靈魂の恨みを恐れたためだ。「暗愚の将」、そういう評判がたった。「酒井」失脚にも関わらず、晴海の抱いている「改暦」や「天文方」構想は、有利に動いた。「綱吉」が「保科正之」の善政を模倣しようとしているのも一因だった。「吉川惟足」が幕府の「神道方」に就任したのも有利だった。ただ父同様の存在だった「山崎闇斎」が亡くなった。その際、「闇斎」は神道の奥秘を「吉川」の前で晴海に伝授した。神道家の一員となった事実はさらに改暦に有利となったのである。「えん」が男の子を生み、俄然やる気がました晴海。「天地」につき洋書等で検証した結果、どちらにも誤謬があることに気がついた。「授時曆」が作成された中国の経度と日本の経度の差が、誤差をもたらすということ。また太陽の運行は円ではなく、楕円であるということ。今、ここに、晴海は、地と天の姿そのものに誤謬と正答を見た。「やったよ、えん」という晴海に、「おめでとうございます。旦那様」と答える「えん」。晴海45歳。北極出地から22年の歳月で天に触れた瞬間だった。成長した晴海は、政治的にも動いた。改暦すれば幕府は豊かになると言い、「堀田」を動かした。「宣明曆」が誤謬だらけということは誰の目にも明らかとなり、朝廷からも改暦の勅が土御門に下され、さらに晴海にも勅がくだった。実は、それは晴海のはかりごとだった。親しい「土御門泰福」を味方につけ、あくまで表面上は「泰福」を主とした。様々な賛否があり、一旦は晴海の「大和曆」は却下されるのだが、状況を囲碁にたとえ、冷静に対処する晴海は次なる手を打つ。京都中に、天文の面白さを伝えるため、「泰福」と天文勝負を行い、彼の勝利を導き、「土御門泰福こそ天の申し子なり」と訴える。世間の「大和曆」への流れは加速度的であり、皆が「泰福」と晴海側になびくようになった。晴海の脳裏に「からん、ころん」の絵馬の音が響いた。彼は微笑みながら泣いていた。

貞享元年10月29日。靈元天皇は「大和曆」の採用を決定し、「貞享曆」の名称を下賜された。

息子に先立たれながらも、幸せな老後を「えん」とともにおくれた晴海は、二人で、初めて出会った金王八幡宮を訪れ、数日後の10月6日、二人は同じ日に没した。

三、『天地明察』の意図と享受

本書の骨格をなすのは、若き碁打ちの「安井算哲」（渋川晴海）が、周りの皆の力をかり、山あり谷ありを乗り越え、天文の道を究め、「大和曆」（貞享曆）という後世、明治になって西洋曆が採用されるまで使われ続けた、名高い「曆」を定めた人生を物語るものである。

彼にはライバルが二人いた。囲碁界の「道策」、算術界の「関孝和」、いずれも天才である。「道策」は現代でも史上最強の碁打ち、と称えられている。「関」については言うまでもない。このライバルの価値を素直に認めるところが、晴海のよい所であり、憎めないところである。沖方は、一つに、この素直な好青年を描きたかったに違いない。ただ、好青年だけでは後世名を残す大事業などではできないわけがない。

「道策」と「関」の天才振りにあこがれ、尊敬から畏怖となるにつれ、世の流れは彼を碁と算術から引き離し、「天地」へと導いていく。彼は自分の進むべき道を確定できていなかった。そ

れは俗に言えば「器用貧乏」であったからだろう。沖方は二人の天才ではなく、「秀才」である、いや、「大秀才」である晴海を描きたかったのだろう。二人の天才は出来すぎて、非の打ち所がなく、そういう人間は面白くもなんともない。山場も何も作りようがないからである。いつでも平坦とも、いつでもクライマックスともいえる。それではボケも突っ込みも、変化も何も無い。変化もないということは、空間も時間もない「無」「空」につながってしまう。

彼は時代により、作られたのである。多少囲碁が強く、いろんなことに興味を抱く「青二才」が、知らず知らずに国家的事業をなしとげるに至る、その運命的な、人生の不思議さが、読者に伝わってくる。

また彼の前には偉大な先輩がいた。「保科正之」「酒井忠清」「水戸光圀」などの政治家、神道の大家「山崎闇斎」、北極出地の「建部昌明」「伊藤重孝」など。政治家三名の個性は見事に描き分けられている。とくに沖方が好いていたのは「保科」であろう。「保科」の幕府での手腕、また藩での手腕、その思考の明晰さなど、戦乱の世から太平の世に移行する時期に、もっとも必要な人物であったし、またそれを沖方は描きたかったのである。その彼の精神は、深く晴海の心に感銘を与え、彼の学問への精神的支柱となったということなのだ。「山崎闇斎」の剛毅なところもいい。父親代わりの彼の存在は成長するのにどんなに必要なことだろう。「建部」と「伊藤」は先輩ぶらない先輩である。子供のように好奇心旺盛な二人の姿勢は、彼の一生に影響を与えたことだろう。「見事な誤謬」とは見事な励まし方である。仲間には、「安藤有益」がいる。彼の実直な姿勢は会津藩氏を代表するものだろう。彼をいつも支える親友として捕らえたい。いぶし銀のような存在だ。

そして二人の女性「こと」と「えん」。控え目な「こと」は本書ではあまり描かれていない。ただ「ことはしあわせものでございます」が口癖であるところに、彼女そのものの性格が明確にされている。「えん」は本書冒頭から登場し、強烈な個性の持ち主である。一旦は嫁ぐもの、お互いつれあいをなくした二人は再婚する。「こと」により、人を愛することを知り、死なれることにより、死別の悲哀も味わった。様々な辛苦を乗り越える、そのきっかけの一つが「えん」との再婚である。沖方が「こと」を深く描かなかったのは、意図的であろう。二人の女性を同様に描けば、焦点がぼやけてしまう。囲碁にたとえれば、「こと」は布石であり、「えん」は中盤から寄せにあたる。

「えん」の兄としての「村瀬義益」も欠かせない存在である。「関」と「えん」を結ぶ重要な存在である。いつも中立を保ち、平常心でいる「村瀬」は脇役として欠かせない。強い個性はないが、晴海を常にそばで支え続けた人物として描かれている。

読者は、晴海の素直な人間性に好感を持ち、それをとりまく様々な人間像に感動したのであろう。立派な政治家、天才、導く先輩、仲間、そういった群像に、あこがれの世界を見出したのだ。だれしもが、よい話を聞きたい、成長したいと願うものである。晴海の成長に自分を重ね、心地よい「人生」を経験したのだろう。

四、まとめ

『天地明察』を讀了し、ほうっとため息をついた。つまらなかったからではない。読みきったという充実感からだ。囲碁の愛好家である自分は日本棋院会員でもあり、雑誌『囲碁ワールド』の熱烈な読者でもある。本書については、そういった雑誌また所属クラブなどで評判になっていた。実際に本書を讀むきっかけは映画化されるという話からだ。見る前に呼んでおこう、ということである。

「安井算哲」は知っていたが、名前を知るだけだった。「本因坊道策」があまりにも有名で、碁打ちとしての彼の存在は「道策」の影に隠れていた。また算術家であることも初めて知った。算術家としても「関孝和」の影の存在だった。それが改暦者である「渋川晴海」と同一人物であることも初耳だった。不勉強を露呈して恥ずかしい限りだが、そういう影の存在、かつ多様性を持つ人物ということに、作者冲方丁は魅力を感じたのでははかろうか。①天才の影の存在、②多芸の人物、それがポイントである

そんな彼が、いつしか天文から「改暦」という国家的事業を成し遂げるところが作者の描きたかったことであり、読者の感動したところであろう。

人間は誰しも何らかの才能を持っているものだ。しかし、若者は自分の才能が何かを見出せないことが多い。進む道には迷うものだ。もしもそれを若いうちに見出し、迷わずに進むなら、それは天才である。それが「道策」であり、「関孝和」だ。晴海はそんな彼らの実力を素直に認める好青年である。「素直さ」の重要性が彼の人間性に見られる。それこそが人間、とくに若者にとって大事なのだ、という冲方のメッセージが伺える。これに若い読者は共感したのだと思う。

素直で多芸な彼の周りに、知らず知らずと大物が集まってくる。政治家、「酒井忠清」「保科正之」「水戸光圀」などが。そして彼を大きく育てていく。若い読者はこんな政治家にあこがれるだろうし、年配の読者はこういう大人になろうと考えることだろう。

政治家は無理としても、「山崎闇斎」「建部昌明」「伊藤重孝」なら身近に感じられることだろう。父が亡くなったときの「闇斎」の「靈魂は滅びない、父はそばにいる」という一言はどんなにか晴海を元気付けたことだろう。「建部」と「伊藤」の「見事な誤謬」は晴海に勇気を与えた。「精進せよ」「頼みましたよ」は暖かさにあふれている。これらに読者は感動したのである。

天才「道策」は晴海の才能を認めている。「天文などおやめなさい」と彼に言い続ける。天才の、すばらしいライバル意識である。また「関」の「授時暦を切れ、頼んだぞ囲碁侍」という天才の投げかける言葉。これらに読者は自分が晴海になったような感動を感じる。文学の面目躍如である。

『天地明察』の意図と受容は以上のようなものである。ちなみに「御城碁」に残された棋譜を見ると、初手天元は実際に存在する。打ったのは先番「安井算哲」、受けたのは「本因坊道策」。結果は白番「道策」の9目勝ちと記されている。

映画『天地明察』は2013年2月20日にDVDとして発売される。購入し、小説『天地明察』との比較をし、論文として、また発表してみたい。